



おすすすめの一冊

ハンス・ロスリング『FACTFULNESS』

『FACTFULNESS』とは著者の造語で、思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣を指す。本書は世界中で300万部、その4分の1は日本で読まれ、2020年上半期ビジネス書大賞を受賞している。

著者のハンス・ロスリング先生はカロリンスカ医科大学のグローバルヘルスの教授で、インドで公衆衛生を学び、アフリカで臨床と研究に従事し、世界保健機関（WHO）やユニセフのアドバイザーも務められた。2006年のTED Conferenceで、最高のユーモアを交えて最高の統計を解説される映像は今もネットで見る事ができる。しかし末期の膵臓癌とわかった時、70近い講演予定をキャンセルして、ご子息夫妻とともに設立したキップマン財団の提供するデータを基に、2017年のご逝去まで本書を執筆された。ビジネス書には全く興味のない私だが、立ち読みで著者が医師と知り購入した。読み始めてすぐに、「世界は先進国



『FACTFULNESS』
ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリング、
アンナ・ロスリング・ロンランド 著
上杉周作、関美和 訳
日経BP

と後進国に分断されているという思い込み」がデータで覆られる。本書では、「よく知っている」と思いがちな多くの質問が出され、目から鱗のような正解に出合う。正解率は「サルが当てずっぽうに3択から選ぶ確率33・3%」より大抵悪い。最も正解率が低かった質問は、「世界中の1歳児の中で、何らかの病気に対して予防接種を受けている子供はどのくらいいるのでしょ

う? A: 20%、B: 50%、C: 80% (正解C)である。最も正答率が低かった回答者群は世界有数のとある銀行で15%、一番よかったのは開発支援の会議者の50%だった。要冷蔵のワクチンはインフラに支えられた「クールチェーン」という物流方式が必要で、銀行も開発支援者も世界の状況を知っておかなければならないのに、この有様だ。

私は辛くも正解で、それは前職（政策研究大学院大学）では学生の約7割がアジア・アフリカからの留学生で、予防接種率が低いと推測して行った麻しんや風しん抗体検査の陰性者が日本人学生にとっても多く、なんと留学生はほぼ0だったという経験からである。それらの国ではWHOの支援でワクチン接種事業が行われている。

本書を読み進めると、私たちの認識が分断、ネガティブ、直線、恐怖、過大視、パターン化、宿命、単純化、犯人捜し、焦りの本能という10の思い込みによってバイジョンアップされていないことを思い知らされる。まさに、心理学でいうところの認知の歪みという「心のフィルター」である。

著者は、「世界は恐ろしいと思う前に現実を見よう、FACTFULNESSを実践しよう」と締めくくっている。

新型コロナウイルス感染症の収束も終息も予測できない今、私たちへの最高の指南であろう。

鈴木真理

すぎき まり

内科医。政策研究大学院大学名誉教授。2020年4月より跡見学園女子大学心理学部特任教授、日本摂食障害学会理事、一般社団法人日本摂食障害協会理事長。